

ハーモニカ



FREE  
2021.01

未知なる大海——

## 「脳」と「心」の世界

フォトルポルタージュ

大山診療所の朴先生

カニジルラジオ、

始めました！



とり大医師の  
**秘**「仕事術」



鳥大の人々

野坂加苗  
病理診断科  
講師

●病院長対談

「たすくのタスク」大崎 洋 (吉本興業会長)

# とりだい病院の病理医は 盛岡生まれの「虫めづる姫君」

野坂加苗 病理診断科 講師

「病理医」とは一般に馴染みのない職業であるかもしれない。しかし、がんの確定診断は病理診断医にしかできない。病院の重要な一部門である。研究である「基礎医学」と患者を診る「臨床」の橋渡し、と称されることもある。普段、表に出ない彼ら、彼女らは何を考え、何を悩んでいるのか。そこには外からうかがい知れない物語がある——。



写真・中村 治

野坂もまた昆虫が好きで、友だちは男の子ばかりだった。  
小学生時代のことだ。野坂は岩手県南部に住む祖母を訪ねた。庭にいた蜘蛛を文庫版)

主人公は警察使の大納言の娘。何不自由なく育てられた「姫」の趣味は、昆虫観察だった。昆虫を採取し、脱皮したり羽化したりする様を観察するのだ。中でも気に入っていたのは、毛虫だった。毛虫を手に這わせてじっと見つめる様を、姫に仕える侍女たちは気味悪がった。そこで姫は虫をこわがらない身分の低い男たちを呼び寄せて一緒に遊ぶようになつた。また彼女は、涼やかな外見にも関わらず、化粧などで身を飾ることに興味がない。年頃の娘がそれでは外聞が良くない」と両親が苦言を呈すと、彼女はこう返す。「世間で、どういわれようと、あたしは気にしない。すべての物事の本当のすがたを、深く追い求めて、どうなるのか、どうなつているのか、しっかりと見なきゃ。それでこそ因果関係もわかるし、意義があるんだから」(光文社古典新訳文庫版)

図鑑をはじめとした本を読み耽つていた少女時代、野坂加苗がもつとも気に入ったのは『堤中納言物語』の『虫めづる姫君』だった。

堤中納言物語は平安時代後期から鎌倉時代の物語が集められた短編集である。編者は不明、虫めづる姫君の作者、書かれた時期も分かつてない。

主人公は警察使の大納言の娘。何不自由なく育てられた「姫」の趣味は、昆虫観察だった。昆虫を採取し、脱皮したり羽化したりする様を観察するのだ。中でも気に入っていたのは、毛虫だった。毛虫を手に這わせてじっと見つめる様を、姫に仕える侍女たちは気味悪がった。そこで姫は虫をこわがらない身分の低い男たちを呼び寄せて一緒に遊ぶようになつた。また彼女は、涼やかな外見にも関わらず、化粧などで身を飾ることに興味がない。年頃の娘がそれでは外聞が良くない」と両親が苦言を呈すと、彼女はこう返す。

「世間で、どういわれようと、あたしは気にしない。すべての物事の本当のすがたを、深く追い求めて、どうなるのか、どうなつてているのか、しっかりと見なきゃ。それでこそ因果関係もわかるし、意義があるんだから」(光文社古典新訳文庫版)

病氣にかからない、あるいは怪我をしないという人はいません。どんな人にとっても医療は生活に切り離せない。しかし、敬遠したり、垣根が高いと感じる人も少なくありません。そこで、医療の世界を「いかに知つてもらうか」→「いかに知る」→「カニジル」となりました。

もちろん、とりだい病院のある鳥取県の名産品、「蟹のだし(味噌)汁」にも掛けています。蟹汁のように、皆さんに愛される存在でありたいという思いを込めました。

「カニジル」が第一にこだわるのは「ファクト」です。

医療に関して、不正確な情報が世の中に溢れています。短く、分かりやすい言葉は人々の心に突き刺さりやすい。しかし、現実はそう簡単ではありません。分かりやすくするために、大切なものを多くそぎ落としています。

医療は、科学的に証明されていることとそうでないことを完全に二分できない世界です。極力、ファクトリエビデンスを重んじていても、そのファクト自体がひっくり返ることもあり得る。大切なのは、愚直に取材し、確かな文献に当たり、真摯に考え爆発的に増えました。その中から、いかに正確な情報を選び取ることができるか。生命の危機にも直結する医学では、その力が

## カニジル宣言

特に必要になります。カニジルはそのお手伝いをしていただきたいのです。

米子市出身の経済学者 宇沢弘文は著書の中で「社会的共通資本」を「一つの国なし特定の地域に住むすべての人々が、ゆたかな経済生活を営み、すぐれた文化を開き、人間的に魅力ある社会を持続的、安定期的に維持することを可能にするような社会的装置」と定義しました。また「一人ひとりの人間的尊厳を守り、魂の自立を支え、市民の基本的権利を最大限に維持するため不可欠な役割を果たすもの」とも書いています。

とりだい病院は、医療機関であると同時に、この地域でもつとも人が集まる場所です。〈すぐれた文化を展開〉し、〈人間的に魅力ある社会を持続的、安定的に維持〉する可能性を秘めているという意味で、まさしく「社会的共通資本」でしょう。

とりだい病院のある米子市を含めた山陰地方は、「過疎」「超高齢化社会」という日本が抱える問題が凝縮されています。一方、人との温かい繋がり、自然など、都会にはない豊かさがある。問題を解決しつつ、豊かさをどう維持していくか——。先んじて未来の問題を解決できる場所なのです。

新型コロナウイルスは日本社会の変化を促すことになりました。リモートワークが進めば、住む場所を選びません。都市と別の視点を持つことが、ウイズ・コロナ、アフター・コロナ時代のニューノーマルとなるかもしれません。

ファクト、医療、地域、この三つを柱として、カニジルは未来を見据えます。

## CONTENTS

**鳥大の人々——病理診断科 野坂加苗**  
**最良の地域医療とは何か——**  
**未知なる大海——**

大山診療所の「朴先生」

「脳」と「心」の世界

大山診療所の「朴先生」

「ノート活用「仕事量の可視化」

「モチベーション・コントロール」ほか

とりだい病院の「カニジル」

たすくのタスク——病院長対談

吉本興業会長 大崎洋

大学病院の謎

内科や外科に第一、第二とついているのはなぜ?」

トリ大「人生を変えた一冊」

放射線部技師 坂本洋輔

カニ箱——カニジルご意見箱

トロピート

『言葉の力』——カニジルラジオ、始めました。

飛鳥の森——編集後記

フオトグラファー 中村 治が切り取る、

とりだい病院の日常

トリビート

堤中納言物語

「姫君」

大納言の娘

中村 治

表紙デザイン

三村 漢

ページデザイン

矢倉 麻祐子

編集管理

吉田慎吾

### Kanijiru vol.6 Staff

スーパーバイザー  
結城豊弘

編集長  
田崎健太

編集  
三宅玲子  
中原由依子  
大川真紀  
西海美香

写真  
中村 治

表紙デザイン  
三村 漢

ページデザイン  
矢倉 麻祐子

編集管理  
吉田慎吾

24	22	20	20	16	14	09	06	03
23	21	21	21	16	14	09	06	03
24	22	20	20	16	14	09	06	03
23	21	21	21	16	14	09	06	03
24	22	20	20	16	14	09	06	03
23	21	21	21	16	14	09	06	03
24	22	20	20	16	14	09	06	03
23	21	21	21	16	14	09	06	03
24	22	20	20	16	14	09	06	03

見て、野坂は「あつ、でつかくて格好いい蜘蛛がいる」と大きな声を出した。ジョロウグモは野坂が住んでいた岩手県中部の盛岡市には棲息していなかったのだ。

「図鑑にジョロウグモの（出す）糸は金色って書いてあつたんです。金色の巣見たーいって思っていたんだです。わあ、これがジョロウグモの巣かって、感動したそうしたら、卵を持って庭に放したんです。で家に連れて帰つて庭に放したんです。大繁殖しちやつた。近所がジョロウグモだらけになつてしまつた」

それですごく親に怒られました、とハハと声を上げて笑つた。ジョロウグモは盛岡の生態系と合わなかつたのだろう、数年で姿を消したという。

勉強は得意だった。一帯で一番の進学校である盛岡第一高校から、東北大学薬学部に進んだ。

「漠然と博士、研究者になりたいって考えていたんです。でも、どういう研究をしていいのか分からなかつた。生物も化学も物理も勉強できるから、とりあえず薬学部に入つてみたんです。勉強しているうちに自分が興味を持つてるのは生物学系、基礎医学だと気がついたんです。そこで、生物系の本場である医学部に行こうと思いました」

この頃、他学部から医学部への転部は稀だつた。薬学部を卒業、国家試験に合格した後、1年間浪人生活を送り、山形

専門医の中でも判断が割れることがあるのだという。自分の中の基準を動かさないようにとって恩師の教えを野坂は今も守つている。

ただし、思索、検討の時間が与えられない場合もある。手術中、予測していない所見を見つけるための術中迅速検査だ。

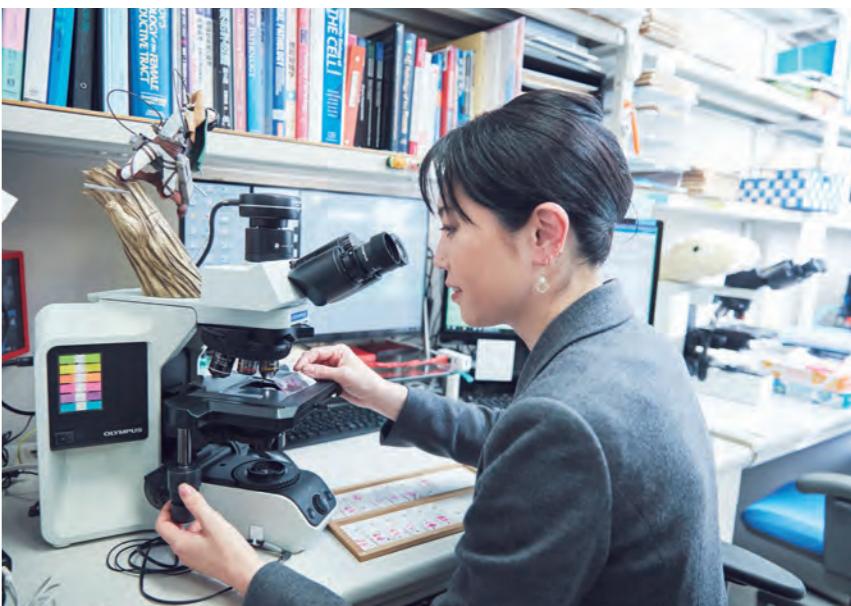
「判定によつて手術のやり方が変わつてしまふこともあります。乳がんならば、乳腺に一番近いリンパ節を採取します。そこにがんがなければ、それで終わりなで皮が厚くなつて、女性としては悲しい状態になつてしまふ」

同じ女性だからこそ、術後の苦しみが分かる。とはいゝ、がんが転移していた場合、切除しなければ命に関わる。病理医として働き始めてしばらくは、その責任の重さで潰されそうになつた。怖かったんです」

「最初の頃は、リンパ節（がん）の転移はありません、の一言を電話するだけで、緊張してだらだら汗をかいてしまつた。怖かったんです」

## 病理医に向いているのは「オタクつ気」のある人

術中迅速検査では、組織の一部やリンパ節が「エアーシューター」と呼ばれる



「机の周りに飾られている、好きな漫画のフィギュアたちが仕事中、最大の癒しである」

大学医学部に合格した。

医学部では基礎医学——人体の構造、機能についての学問に夢中になつた。

「人の身体つてこんな風になつていての」

かつて紐解いていくのが樂しかつた。良

くできているんだなという感動することばかりでした。研究の方に行くつもりだったんですが、当時の病理学の教授

が、病理とは基礎（医学）と（患者を診察する）臨床（医学）の橋渡しをする学

問なんだよという話をされたんです。折

角、医学部に入つたのに、臨床的なものと繋がりがなくなるのもつまらないなと

## 診断によつて手術のやり方が変わつてしまつ「術中迅速検査」

鳥大では全くないです」

「鳥大の良さ？ 出身大

学での差別がないことで

すね。（他大学出身は）外

様扱いされるなんて聞

いたことがありましたが、

鳥大では全くないです」

「鳥大では全くないです」

思つて、病理に進むことになりました

病理学とは、疾病的形態と機能などを総合的に研究する学問を指す。そ

して大学6年生で結婚していった野坂は、卒業後

の研修先に夫の地元である、とりだい病院を選んだ。2006年4月のこ

とだつた。そこから米子に居づけている。

「鳥大では全くないです」

細胞一つひとつのがおかしい、並び方もぐちやぐちやになつていて。ぐちやつとなつていて、場合は、倍率を上げて（見て）みる

標本は青色、あるいはピンク色の染料で色づけされており、組織の形が見えやすくなつていて。野坂たちが普段使つているのは、400倍拡大の顕微鏡である。100倍ほどの拡大で、判断がつくものがほとんどだ。「ぐちやつと」なつている場合、倍率を400倍に上げる。

「ちよつとだけ変でも、がんになりようがない」というのもある。異型がやや強めに出ている場合は、今はがんではないですけど、念のためフォローアップ（経過観察）してください」というコメントを書ききます」

さつと顕微鏡を覗き、レポートを書く場合がほとんどだが、一時間以上、腕組みを続けることもある。

「大学病院ですから、難しい症例が集まつてきます。見た事のない細胞の形、技師が凍結して切片化。標本を作成。野坂は顕微鏡で標本を覗き、手術室のスクリーンに一番近いリンパ節を採取します。そこでがんがなければ、それで終わりになりますけれど、がんがあつた場合、脇のリンパ節をすべて取らなくてはならない。そうすると腕がリンパ浮腫になつて皮が厚くなつて、女性としては悲しい状態になつてしまつ

同じ女性だからこそ、術後の苦しみが分かる。とはいゝ、がんが転移していた場合、切除しなければ命に関わる。病理医として働き始めてしばらくは、その責任の重さで潰されそうになつた。怖かったんです」

「最初の頃は、リンパ節（がん）の転移はありません、の一言を電話するだけでも、緊張してだらだら汗をかいてしまつた。怖かったんです」

同じ女性だからこそ、術後の苦しみが分かる。とはいゝ、がんが転移していた場合、切除しなければ命に関わる。病理医として働き始めてしばらくは、その責任の重さで潰されそうになつた。怖かったんです」

す。細胞一つひとつのがおかしい、並び方もぐちやぐちやになつていて。ぐちやつとなつていて、場合は、倍率を上げて（見て）みる

標本は青色、あるいはピンク色の染料で色づけられており、組織の形が見えやすくなつていて。野坂たちが普段使つているのは、400倍拡大の顕微鏡である。100倍ほどの拡大で、判断がつくものがほとんどだ。「ぐちやつと」なつている場合、倍率を40

最良の地域医療とは何か――

# 大山診療所の「朴先生」<sup>パク</sup>

地域に赴いて患者を診ることが地域医療だと思っていたと朴大昊は言う。しかし、実際はそれだけではない。患者や家族、そして地域が抱える問題や思いを受け止め、コミュニティを支えることだった。あなたのためには何ができるだろうか……。大学病院の診療とは違う、医師の役割とは。

写真／文 中村 治



ぱくがカニジルの撮影で山陰に入るときは雨が多い。この日も、近づいてきた台風の関係で、ぱつぱつ細かい雨が落ちていた。鳥取県のシンボルとも言える大山の中腹にある大山町は、風光明媚な場所である。見晴らしのいい場所からは日本海が見渡せ、山の傾斜に沿って美しい水田が広がり、雨の重みでさらにこうべを垂れた稻穂が、一面を黄金色に染めている。そのとき、ぱくはここで朴大昊先生を撮影したいと思った。それが前ページの写真だ。

協力してくださったのは、先生の患者である若林さん。御年96歳と聞いて驚いた。元ラグビー選手でがつちりとした体格の朴先生に支えられながら現れた若林さんの笑顔からは、高齢者の独居という重い言葉の響きは感じられなかった。

大山町の住民は約16000人、その4割が65歳以上の高齢者だ。大山診療所はとりだい病院のある米子市まで、車で30分ほどの距離。それほど遠い距離ではない。しかし、車を運転できたとしても、ほとんどの高齢者は交通量の多い国道9号線に入ることができるないのだという。高齢者にとっては、米子ははるか彼方にあり、大山町が生活のすべてなのだ。一帯の医療を担う朴

朴 大昊

静岡県浜松市生まれ。鳥取大学医学部医学科卒業。沖縄県立中部病院、八重山病院附属波照間診療所長などを経て、2019年より大山町国民健康保険大山診療所所長。専門は家庭医療、プライマリ・ケア。

先生の責任は重い。  
「家族がないからとか、田舎だから家で死ねない、というのは違うんじゃないかな」と思っているんです」

そのためには、どうコミュニティを維持していくのかを問い合わせ続ける必要がある、と朴先生は力を込める。地域医療を担う医師は、まず総合診療医として、どんな病気にも対応できる技術が必要とされる。それだけではなく、地域を見つめる力が試される。つまり、病状や疾患だけでなく、その人の家族や仕事、人生を見て、時に患者とともに大切な決断を行なう必要に迫られる。そして、どこで、どう最期を迎えるのか。医師として、良き隣人として、ともに人生の最後の場面に向き合うのである。

一昨年に赴任した朴先生の自宅は、大山診療所から歩いて数分のところにある。空き家だった日本家屋での一人暮らしだ。町内に住んでいるので、患者に不測の事態があつた場合もすぐに駆けつけられる。朝起きると玄関に野菜や果物が置いてあつたりするのだそう。僕は野菜をつくれないけど、病気を診ることはできるんです、と朴先生はうれしそうに笑った。

写真家 中村治



日々の診療とともに、週に数回往診に出かける。この日は自宅で末期がんの治療を続ける高橋さんを訪れた。入院でなく、自宅で治療を続けたいという希望を、出来る限り叶えてあげたい、と朴先生は言う。

## 未知なる大海—— 脳と心の世界

文・三宅玲子  
写真・中村治

同居する親が急に怒りっぽくなつた——。どこの家庭でもあるごく日常の出来事だ。見る限り、父親はほかには体調も生活も何ら変わりがない。親父も年をとったなあ、などとやり過ごしたとしても不思議ではない。ところが、こうした性格の変化に脳内の異変が関わっている場合がある。また、新型コロナウイルスによって、心の病気——うつ病が増えたという報道もある。このうつ病は脳と関係があるという。身近で知らない、「脳」と「心」——。



## 脳機能を温存するための 「覚醒下手術」

手術灯が医師の手元を照らしている。全身をシートで包まれた患者が手術台に横たわる。全身麻酔により既に意識はない。2人の医師が頭蓋骨を開くために穴を開ける作業が始まった。

ドリル音が室内に響く。

手術台の脇には30インチほどのモニターが設置されている。カメラで撮影した脳内のある部位を映し出すのだ。

これから覚醒下手術が行なわれる。覚醒下手術とは、手術中に患者を起こして意識がある状態で行なう特殊な手術だ。

患者は2時間後に覚醒する予定だという。全部で8時間かかる大手術だ。

全身麻酔をした患者を手術中にわざわざ起こすとは、一体どういうことなのだろう。

私たち前日に脳神経外科の黒崎雅道教授に手術のあらましを聞いていた。黒崎教授によると、脳腫瘍は、腫瘍が脳のどの部分にあるかによって、術後に起こり得る合併症が異なる。例えば、手足を動かし言葉を喋る機能を司る「前頭葉」の悪性腫瘍を取る際に前頭葉の組織も一部取り除くことになる。そこで、手術の途中段階で患者が意識を取り戻した状態にし、発語や手足の動きに影響が出ていないかどうかを確かめながら慎重に除去を進めるのだ。

精神科を受診された患者さんが、MRIを撮つたところ腫瘍が見つかって我々脳神経外科に紹介されることは珍しくありません



「手術しておわりではない。人とのつながりに支えられている」(写真左・黒崎教授)

## 4科の連携で脳の病気に迫る

脳に関わる疾患を巡つて複数の診療科が連携して関わる仕組みがとりだい病院にある。「脳とこころの医療センター」だ。前述の脳神経外科をはじめ、脳神経内科、脳神経小児科、そして精神科の4診療科は指摘する。

脳を扱う難しさの一つは、異変の原因がつかみづらいところだ。そう黒崎教授は指摘する。

「脳腫瘍は、腫瘍ができる場所によっては、性格の変化やそれまでになかった言動が見られるようになるなどの異変が起ります。最初は脳腫瘍と分からずに精神科を受診された患者さんが、MRI(核磁気共鳴画像法)を撮つたところ腫瘍が見つかって、我々脳神経外科に紹介されることは珍しくありません」

脳に腫瘍ができることによつて、怒りっぽくなる、物忘れがひどくなるなど、性格に影響があることがある。そのため、短絡的に老いと結びつけるのは、ときとして脳の異変を見逃す危うさにつながるといふ。

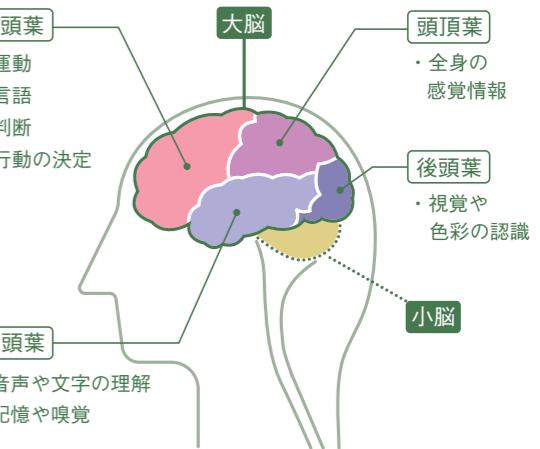
そもそも脳とは何か――。医学的に定義すれば、頭蓋骨の中にあら神経細胞の集合体である。

人間の脳は脊椎動物の進化の初期段階では、単に神経細胞が集まつたコブのようなものに過ぎなかつた。進化の過程で

心臓、肺、腎臓などの臓器はその役割がほぼひとつ。一方、脳はさまざまなる部位から成り立つており、それぞれ異なる働きをしていることだ。

脳内に起きた異常から引き起こされる病気は幅広く複雑だ。認知症、パーキンソン病、てんかんといった内科的なアプローチを中心とする病気から、脳腫瘍をはじめとする外科手術を含めた治療を行なうものまである。内科治療が中心とされるパーキンソン病やてんかんが、病状や条件によつては脳外科治療で回復することもある。

「例えば、初見ではてんかんが疑われた患者さんが、原因を調べていくと脳腫瘍



が連携して関わる仕組みがとりだい病院にある。「脳とこころの医療センター」だ。前述の脳神経外科をはじめ、脳神経内科、脳神経小児科、そして精神科の4診療科からなる。

このうち、脳神経内科では、神経難病と呼ばれるパーキンソン病や筋萎縮性側索硬化症などから脳梗塞、てんかん、しびれ、認知症などで、神経に関わる幅広い疾患を診ている。

脳神経内科と脳神経外科の区別は、外科手術が可能かどうかで分かれ。また、脳神経の異常がない心の問題を扱うのが精神科だ。しかし、最近では認知症など両方にまたがるようになっているものもある。

脳神経内科から見て、脳神経外科や精神科との連携体制は、患者の治療にどのようにならせるのだろう。脳神経内科の花島律子教授は、「てんかん」を例にとる。

てんかん――突然意識を失つて倒れ、手足の痙攣などを起こす疾患は、遺伝的素質の他、脳の損傷によつても起きる。てんかんは、「脳神経内科」に区分され、抗てんかん薬の服用、発作を抑制する薬物療法が主流とされている。

ところが――。

「例えば、初見ではてんかんが疑われた患者さんが、原因を調べていくと脳腫瘍

が明らかになり、脳神経外科で手術する

というケースがあります。他方、脳神経内科と精神科は違いが分かりづらいのですが、診察のはじめに行なうMRIなど

の検査結果が、どちらの診療科で治療するかの分岐点になります」

症状からだけでは見つけ出しにくい病気が検査によって明らかになることがあります。幻覚や妄想など精神科の疾患が疑われる患者が、検査をしてみると脳炎だったということもある。また、認知症の根

本は記憶をはじめ、正常な行動に必要な脳のシステムが壊れることであるため、脳神経内科が診療を行なう。ただ、幻覚や怒りなど感情面の変調が強く現れる場合は精神科と連携する。

脳疾患（脳梗塞や脳出血、くも膜下出血など）や事故による頭部外傷による脳の損傷が原因で記憶障害や失語、暴力的になるなどの高次脳機能障害が起こることがある。日常生活や対人関係に支障をきたすため、心理面に大きな負担が生じることも多い。

前出の黒崎教授は、喜怒哀楽といった感情を含めた心のありようと脳のつながりは、まだよく分かっていないと言う。

「心は身体のどこにあるのかさえ、まだ繰り返しになるが、脳と心が関係していることは間違いないが、それ以上はまだ分からぬことが多い」ということだ。

また、脳の状態が正常であれば心が整っているかといえば、そう言い切れるものでもないらしい。



「自分」という意識、心の働きを明らかにしたい（兼子教授）

時代を経て、20世紀はさまざま研究により謎がかなり解明された。医学界では20世紀を「脳の世紀」と呼び、「心は脳に宿るのか」を議論した。MRIが登場し、遺伝子検査の技術が進化し、現在では心も脳の機能と深く関係しているという概念が一般的になっている。

## それでも

### 脳と心は分からぬ

とりだい病院精神科の兼子幸一教授は近世のフランスの哲学者・デカルトを例に挙げてこう話した。

「デカルトは心と体は別物と考えています。いわゆる心身二元論です。脳の働きが心につながるという考え方では決してありませんでした。近年は生物学が進歩し、心も脳を調べれば全部分かるんじゃないかという楽観論も登場しましたが、心の働きはそう単純に脳の働きに還元できるものでもなさそうだという見解もあります。心と脳の働きはまだまだギャップがあると考える方が素直だと思います」

人間は意識を失ったとき心の基盤としての脳は動いていない。臨床医学的には、そのとき心はないと考える。逆に言えば、心が動くときは、脳が働いているということだ。脳の各部位が、喜び、怒り、悲しみなどさまざまな感情を司るが、だからといって心は脳の働きを足し合わせた

時代を経て、20世紀はさまざま研究により謎がかなり解明された。医学界では20世紀を「脳の世紀」と呼び、「心は脳に宿るのか」を議論した。MRIが登場し、遺伝子検査の技術が進化し、現在では心も脳の機能と深く関係しているとい

う概念が一般的になっている。

時代を経て、20世紀はさまざま研究により謎がかなり解明された。医学界では20世紀を「脳の世紀」と呼び、「心は脳に宿るのか」を議論した。MRIが登場し、遺伝子検査の技術が進化し、現在では心も脳の機能と深く関係しているとい

されている。

兼子教授はうつ病を「扁桃体が暴走した状態」と表現した。

現在、うつ病に対しては、扁桃体の過剰な動きを抑制する新たな試みが行なわれている。

もちろんのこと、日常生活も難しくなります



「未知なところが多い分野だからこそやりがいがある」（花島教授）

内因性の精神病に例をとつて、心と脳の働きの関わりについて説明しよう。うつ病、双極性障害、統合失調症などだ。いずれも何らか脳の基本的な変調があることを受けているということは多分にあります。その意味では育つてきた来歴も影響してきます」（兼子教授）。

うつ病は、脳の深い部分にある扁桃体

の働きと関わりがある。うつ病になると怒りや不安を司る扁桃体が過剰に働くと桃体の動きに近づけるように、患者本人とコミュニケーションを取りながら探つていく。

「たとえば、憂鬱な感情が生み出される、それが脳のどのような働きによって生み出されるか、まだ分かっていません。たゞ、うつ病の患者さんを平均してみると、扁桃体の活動性数値が上がっているのは

確かなので、部分的に分かっているところから攻めていこうということなのです」繰り返しになるが、脳と心が関係していることは間違いないが、それ以上はまだ分からぬことが多い」ということだ。

また、脳の状態が正常であれば心が整っているかといえば、そう言い切れるものでもないらしい。

ただし、偏りには特別な価値観を入れずみてほしいと、兼子教授は念を押した。「偏りがあるといふのはいいことでも悪いことでもあります。個々の特徴に過ぎないものです。脳の働きに偏りがあるがために特異な才能でブレイクスルーを産み出せる人もいれば、それがなくて平凡な幸せを生きられる人もいます。幸福かどうかの価値観と脳の働きを対応させるのはまた異なる次元の話だと思いますね」

分からぬことだらけの脳と心の関係の中では、はつきりしているのは「ものの見方」と「経験」が重要な役割を果たしているというのだ。「焦点を当てているところはよく見えたり認識したりできますが、そうでないところはうまく認識できない。カメラで撮るよう均質均等に周りを認識するのとは違います。

自分の認識に自分でフィル

## とりだい病院 脳とこころの医療センター

- 脳神経外科
- 脳神経小児科
- 脳神経内科
- 精神科

脳神経疾患や心の病には、診療科の分野が重なる部分あるいは複数の診療科で診るべき疾患も多くあります。「脳とこころの医療センター」では、4つの診療科が隣あって診療し、互いに連携を図ることでより的確な医療を提供できる体制をとっています。



文・三宅玲子

1967年熊本県生まれ。「ひとと世の中」を中心にオンラインメディアや雑誌、新聞にて取材、執筆。近著『真夜中の陽だまり』（ルボ・夜間保育園）（文藝春秋・2019年）は、福岡・中洲に近いどうんこ保育園に4年近く通つて書いた。





病院長が時代のキーパーソンに突撃！

## 東京でずっと暮らしていると「バランス」が悪くなる

**原田** 大崎さんが坪田信貴さんと出された『吉本興業の約束』を読ませて頂きました。この本では〈吉本が考える地方創生〉と一章を書いて 地方創生に触れられています。そこでは是非、大崎さんに弟子と病院を見て頂きたいと思つたんです。

**大崎** ほくは大阪の堺で生まれて、なぜか吉本興業（以下吉本）に入りました。入社して6年目に会社が東京で事務所を作るっていうので、レンタカーを借りて布団とか積んで東京に行つたんです。

**原田** 漫才ブームの頃ですね。

**大崎** ええ。それでバタバタして気がついたら、もう何十年も経つてました。あるとき、新宿の（JR）ガード下で電車の通る音を聞いて、突然、昔を思い出したんです。こんな音、子どもの時以来、聞いていなかつたなあって。なんか東京でずっと暮らしているとバランス悪いなと思うようになつたんです。

**原田** 私は出張でしばしば東京に行きました。東京は便利で魅力的な街ですが、日本の中で特別な場所。東京を標準に考えることはできないと思います。

**大崎** それで十年前の（2010年）12月頃に、東京の下町の本郷で、今の社長の岡本（昭彦）君と銭湯に行って、サウ

ナに入つていたんですよ。するとNHKで、地方が疲弊していく若者が働く場所がないというニュースが流れました。隣りに座つていた岡本君に「お笑いって産業にもならへんし、沢山の雇用を創出するわけではないけれど、47都道府県に契約社員一人ずつ雇つて、地方から大阪や東京に出てきている芸人を住ませたら、おもろいんちやうか」と話したんです。

**原田** それが「47都道府県住みますプロジェクト」となつた。

**大崎** （2011年）1月4日に吉本のホームページに、プロジェクトを始めます、契約社員募集しますって載せました。そうしたら、5千人ぐらい応募がありました。その中から面接して47人採りました。4月1日、（通常採用）新卒の子たちと一緒に入社式をしました。そ

の子たちと一緒に入社式をしました。そうしたら、〈住みます社員〉の子たちが、胸張って、地元のため、故郷のために頑張りたいと言うんです。その思いと熱量に驚きました。

**原田** ここ米子もそうですけれど、地元に熱い思いを持つ若者は多いです。とはいえ、吉本も民間企業。彼らを雇うことでも、大きな赤字が出れば経営者としてはまずい。

**大崎** （大きく頷いて）実家に住むといふ芸人はともかく、契約社員には給料を払わないといけない。財務（担当）に相談したら、2億2、3千万ぐらい赤字が出るっていうんです。それだったら、ま

あいかと始めました。ところが、一年経つてみたら、百何十万なんですか黒字でした。芸人の若い子たちが、昨日黒字でした。芸人の若い子たちが、昨日来て明日帰りますではなくて、本当に住んだのが大きかったです。その決意が伝わったのか、地元の方々に可愛がつてもらつたんですね。

**原田** ただ、地方は東京や大阪と違って、芸人の仕事は多くないとと思うのです。だから仕事は多くないと思うのです。

**大崎** 大きいのはなくとも小さいのがあるんです。町役場や村役場に、「ぼくたち吉本から来ました、ここに住んでます」って挨拶に行つて、コミュニティFMのラジオの仕事をもらつたり、村祭りの司会をして一日何千円の世界。それを積み重ねての黒字でした。芸人って、一人ひとりが個人事業主なので、気合いが入つて。喋りだけで、一生食つていいこうという連中なので、ぼくらみたいなサラリーマンよりも生きる力があるんですね。

**原田** 文字通り、舌先三寸（笑）。

**大崎** 地方に行って、住みます芸人と住みます社員にたまに会うんです。そうしたら、老いたらずに従え、じやないんですけど（笑）。

**大崎** ほくみたんな素人がふつと来て、お邪魔なはずなのに、いろいろと説明してくださつた。皆さん温かく丁寧。わざわざぼくのために、つていうんではなく、それが普通、いつもこんな感じで仕事をなさつてているんだろうと感じました。あまり褒めてしまふと、嘘臭くなつてしまつますけど（笑）。

**原田** 「吉本興業の約束」に一昨年、2019年に入院していたと書かれています。

## 医療もお笑いもAーにできない「役割」がある

**原田** ところで、大崎さんは米子は初めてですか？

**大崎** いえ、実は鳥取は父方の故郷なんです。親父は大阪の堺生まれなんですが、おじいちゃんが大山の山の奥で生まれた。戦争の後、おじいちゃんが大阪に出てきて、おばあちゃんと知り合つて親父が生まれた。親父が亡くなる前、故郷に分骨したいつて親父とお袋たちと車に乗つて分骨の場所を見に来ました。行つてみると田んぼの畦道のところにばつんと石が置いてあつて、ここですって言われて（笑）。それが25年前です。

**原田** 今回、PCR検査で陰性を確認してから、病院を見学して頂きました。大崎さんの目に、とりだい病院はどう映りましたか？

**大崎** ほくみたんな素人がふつと来て、お邪魔なはずなのに、いろいろと説明してくれました。皆さん温かく丁寧。わざわざぼくのために、つていうんではなく、それが普通、いつもこんな感じで仕事をなさつているんだろうと感じました。あまり褒めてしまふと、嘘臭くなつてしまつますけど（笑）。

**原田** 「吉本興業の約束」に一昨年、2019年に入院していたと書かれていました。

**大崎** 副腎に腫瘍ができていたんです。

**原田** それで十年前の（2010年）12月頃に、東京の下町の本郷で、今の社長の岡本（昭彦）君と銭湯に行って、サウ

で、地方が疲弊していく若者が働く場所がないというニュースが流れました。隣りに座つていた岡本君に「お笑いって産業にもならへんし、沢山の雇用を創出するわけではないけれど、47都道府県に契約社員一人ずつ雇つて、地方から大阪や東京に出てきている芸人を住ませたら、おもろいんちやうか」と話したんです。

**原田** それが「47都道府県住みますプロジェクト」となつた。

**大崎** （2011年）1月4日に吉本のホームページに、プロジェクトを始めます、契約社員募集しますって載せました。そうしたら、5千人ぐらい応募があつた。そうしたら、5千人ぐらい応募があつたんです。その中から面接して47人採りました。4月1日、（通常採用）新卒の子たちと一緒に入社式をしました。そ

**大崎** ほくみたんな素人がふつと来て、お邪魔なはずなのに、いろいろと説明してくださつた。皆さん温かく丁寧。わざわざぼくのために、つていうんではなく、それが普通、いつもこんな感じで仕事をなさつているんだろうと感じました。あまり褒めてしまふと、嘘臭くなつてしまつますけど（笑）。





## 「太陽黒点」山田風太郎 ベストコレクション

山田 風太郎  
KADOKAWA / 角川文庫

放射線部に所属する坂本洋輔技師が山田風太郎のミステリー小説『太陽黒点』に出会ったのは、岡山大学医学部保健学科放射線技術科学専攻に通う大学2年生の頃だった。大学に入って間もなく見たアニメ『バジリスク～甲賀忍法帖～』。その原作が1950年代に書かれた山田風太郎の『甲賀忍法帖』であることを見り、すぐに読んでみたという。そして、斬新な世界観が約40年以上も前に書かれたものであることに驚いた。

「今の時代に書いたと言われても不思議じゃないくらい、10代の僕にとって、新鮮で面白い作品だった」たまたま、2010年に山田風太郎賞が創設され、絶版となっていた作品が続々復刊される時期だった。「月ごとにどんどん復刊されていた。そこで、軒轅が約40年以上前に書かれたものであることに驚いた。

「よくある戦争の物語だったら、こういう言葉も感動するだけで終わる。でも、ミステリー小説として見せられたことで、自分自身に突き刺さるかたちで残った」

放射線技師としてとりだい病院に就職して間もなく、父親が病気に

カニジルご意見箱

**力二箱**

Q

A

コロナ禍のなか予定通り発行してくれたことに感激しました。取材、撮影、編集作業は大変ではなかったですか？（Y.Y）

コロナウイルス感染症が拡大した今年の春、カニジルは4杯目の校了を控えていました。さすがに都市圏からの来院は許されず、この時ばかりはオンライン。7月にスタートする5杯目をさてどうするか…。「多くの人が不安を抱えている時、何もかもが一変してしまった時だからこそ、病院の広報誌として発信していく使命があるはず！」そんな大仰な思いがあったかどうかは別として、誰からも発行延期という言葉は出ません。編集メンバーはPCR検査を受け、6時間ほど待機して陰性の結果が出てから院内の打合せや取材に臨みました。連載『たくさんのタスク』は延期→中止となりましたが（今号の大崎洋会長でした）、特集企画ページ数を増やすことでカニジル5杯目は予定通り発行！突然増えた原稿枚数に幾度悲鳴を上げたかは、推して知るべし…。withコロナに少し慣れたことあり、6杯目は通常構成に戻っています。（西海）

カニジルへのご意見・ご感想を募集中！



[www2.hosp.med.tottori-u.ac.jp/kanijiru/e/](http://www2.hosp.med.tottori-u.ac.jp/kanijiru/e/)  
とりだい病院ホームページからもアクセスできます。  
トップ > 病院のご紹介 > 当院の広報物 > 読者アンケート回答フォーム



抽選で  
カニジル  
ステッカー  
プレゼント！

※ステッカーの種類は選べません。

# とりだい病院広報がスラスラ回答 大学病院の謎

## 内科や外科に第一、第二とついているのはなぜ？

### 起源については諸説ある

内科や外科に番号がついているのは大学病院だけではなく、総合病院でも見かけることがある。いわゆる「ナンバー診療科」である。

当院の先生方や事務職員に聞いてみたところ「日本の医学はすべてドイツからきたもの。だからこの事もしかしり」とか、「東大をマネしたのでは」とか、「大学院の設置基準で必要だったから」など、バラバラな答えが返ってきた。どれもそれなりに当たっていると思われる…。そもそもと内科学や外科学は、多くの領域に別れている。一人の教授がすべての領域の診療、そして教育を受け持つことは実質的に不可能だった。そこでもう一人の教授が配置されたり、細分化されたりして「やー、三」という「ナンバー」が付されることになったのだ。



### 第一、第二は「学閥」の産物？

取材をしていくうちに、第一と第二の違いは、教授の専門分野だけでなく、「学閥」が少なからず関係していることが分かった。日本全国の医学部の基礎はいわゆる七旧帝大。それ以外の大学は、旧帝大より教授を招聘していた。だから第一と第二の教授は「系統」が違うこともあった。特に外科では、手技、手法にそれぞれの流派があり、門外不出だったという。同じ大学病院内でも第一と第二はライバル同士。お互いが切磋琢磨していたとも言えるが、同じ病気の患者さんは、かかって

### とりだい病院が目指すのは「患者さんファースト」

このようなナンバー診療科のヒエラルキーや壁は、患者本位でないことや、それぞれが別々の器機や部屋を使いつけ医や関連病院の医師が、第一外科の所属またはOBであれば第一外科に、第二外科ならば第二外科に紹介するということがあったようだ。

たنانバー診療科によつて違う治療を受けていた。かかりつけ医や関連病院の医師が、第一外科の所属またはOBであれば第一外科に、第二外科ならば第二外科に紹介するということがあつたようだ。

当院でも旧第一内科や旧第一外科と表示に名残はあるものの、旧第一、二、三内科は循環器・内分泌代謝内科、消化器・腎臓内科、呼吸器・膠原病内科に、旧第一、二外科は消化器・小児外科、心臓血管外科、呼吸器・乳腺内分泌外科にと臓器・疾患別に分かれ、患者さんは病気の種類によつて、その該当科に紹介され治療が行なわれてゐる。

ただ、ナンバー診療科にも利点はあつた。一つの診療科が多く専門分野を有していいたので、異なる病気を併発している患者さんの場合、科内で気軽に相談することができたのだ。臓器・疾患別となつた現在は、横のつながり、すなわち診療科間の連携がとても重要なことだ。とりだい病院は、内科同士はもちろん、内科外科でも垣根なく、チームでの診療を目指している。

ナナンバー診療科こそ、白い巨塔の象徴だったとは：とりだい病院広報も初めて知つた事実であった。（中原）

この連載では皆さまからの質問を受け付けています。

大学病院、とりだい病院について疑問・質問のある方はとりだい病院 広報・企画戦略センターまでお送りください。

疑問・質問はコチラ！

e-mail [byouin-kouhou@med.tottori-u.ac.jp](mailto:byouin-kouhou@med.tottori-u.ac.jp)

# 『言葉の力』——カニジルラジオ、始めました。

東京の私立大学病院で働く友人の医師がこんな事を口にした。

## Tottori Breath

「患者さんとの向き合いが、流れ作業のようになってしまふ。本当はちゃんと向き合いたいが忙しさで余裕がない。これでは絶対いけない」彼によれば新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、日々の診察に加えコロナへの危機管理や感染対策、不安相談など、それまで全くなかった仕事がいくつも増えたという。そのうえ、リモートワークでの会議やステイホームでストレスも蓄積。患者さんたちとの向き合い方も「これまでの対応や説明で本当にいいのか」と自問自答を続け、言いようのない違和感を覚えていると語った。普段は仕事への誇りと医療を熱く語り、率先して現場に駆けつける熱血漢である友の肩の落ち方に同情を禁じ得なかつた。

コロナ禍の中、人との関わりや仕事、出会いや別れ、今までの日常が形を変えてしまつた。経済や観光、教育、医療などの社会インフラだけでなく、毎日のマスク装着や出口の見えない現状が、知らず知らずに大きなストレスとしてのしかかる。

そんな時代だからこそ「言葉の力」や「語りかけ」の大切さを痛感する。

特に医療の現場で「語りかけ」は重要だ。

治療の経過を丁寧に説明するための語りかけ

や、患者さんへの声かけと説明。思いやりのある会話。そんな医師・看護師と患者さんの会話から、病状や体の異変を知るシグナルを手に入れることもある。優しい言葉や語りかけは、気持ちをリラックスさせ病状を軽減させ互いの信頼関係を築く。患者の気持ちに寄り添い理解を深めることによってこそ、安心できる医療を実現できるのではないか。

### ラジオは、生の声に飢えている人の味方

本誌『カニジル』は「言葉の力」と「語りかけ」の力に着目し、山陰放送で「カニジルラジオ」という新しいラジオ番組をスタートした。

先日、私の大切な師匠の一人で伝説のラジオ番組「パックインミュージック」(TBSラジオ・1967年~82年まで放送された深夜放送番組)でパーソナリティを務めた耕井論平さんとラジオの力について話をしてきた。名司会者の生島ヒロシさんや久米宏さんを見てた人物だ。

「ラジオはパーソナルメディア。時代を映す風俗的一面も持つ。わざわざ早く寝て深夜ラジオを聴く若者が、ラジオのスイッチを入れて深夜放送ブームが生まれた。茶の間からテレビに締め出されたラジオと、若者が結びついだ。ラジオはリラックスして何でもしゃべれ

大きさの美味しいパンのようにリスナーに届く。担当する木野村尚子アナウンサーは地元島根県出身。毎週土曜日の昼12時25分~55分放送。公式YouTubeとradikoでも配信。本誌『カニジル』とともに、田崎さんの豊富な引きだしと多彩なゲスト、医療の話を是非ラジオでも聞いていただきたい。大切な「言葉の力」とともに。



結城 豊弘

読賣テレビ放送株式会社  
報道局兼制作局 チーフプロデューサー

1962年鳥取県境港市生まれ。読売テレビ報道局兼制作局チーフプロデューサー。「そこまで言って委員会NP」「ウェーブアップ!ぶらす」等の取材・番組制作を担当。とりだい病院特別顧問と本誌スーパーバイザーを務める。鳥取県アドバイザリースタッフ。境港市観光協会会長。

## 飛鳥の森 カニジル編集雑誌



結城さんの『Tottori Breath』でも触れているように、10月から山陰放送で『カニジルラジオ』(毎週土曜日、昼12時25分~)が始まりました。古くは旧知のテリー伊藤さんがパーソナリティを務めるニッポン放送の昼間の帯番組にはほぼ毎週出演、「真説・長州力」発売に合わせて長州さんとオールナイトニッポンをやつたり――今も月一回、プロゴルファーのタケ小山さんの『グリーンジャケット』(Inter FM)で喋っています。一出演者として気楽に話すのとは違つた難しさを感じています。少年時代から青年時代の始めまで、ぼくのそばにはいつもラジオがありました。島田紳助さん、ツボイノリオさん、越前屋俵太さんたちの『ハ

番組にしましょう。

編集長 田崎健太

### 編集 三宅玲子

米子に向かう朝、羽田空港で。伊丹空港への着陸か羽田へ引き返す可能性があると聞き、多めの移動時間を含んで珍しく朝定食を胃袋に収めたのですが。無事に着陸し校門を終えた翌朝。鳥取経由で戻る私に、鳥取で待つ書店主から帰京手段を心配するメールが。雪ですが、ぽかぽかします。さて、飛行機は飛ぶでしょうか。

### 写真 中村 治

今号のフォトボルタージュでは、文章も書かせてもらいました。取材を通して、改めて『的確な質問をすることの難しさ』を知りました。聞き手がしっかりととしたビジョンを持って質問しないと、話し手から聞くべき答えを引き出せない。その辺は良い写真を撮ることにも通じるので、質問力を付けるために、普段の会話から意識しているこうと思いました。

### 編集 大川真紀

対談の撮影で、久しぶりに病院近くの商店街を歩きました。いつも通り人通りは少なく、静かなシャッター街。しかし県外の方からは、米子の街並みは「昭和」を感じるレトロな雰囲気がよいと褒めていただくことも多くなるほどそうなのかと思う。「カニジル」の取材を通じて、違った視点で地域を知る機会が増え、新しく気づかされることも多くなっていました。

### 編集 西海美香

取材が好きだ。自分が日々働く職場といえど医療という専門分野のなか、知らないこと、わからないことが多すぎる。医師をはじめ多くの職員の話を聞いて、どれだけのウロコが私の目から落ちただろう。これを伝えなければ意味がない…んだよな。

### 編集 中原 由依子

「謎」取材では鳥大医学部周年史を「地域医療」取材では大山町誌を読みました。どちらにも医療を望む学生や地域住民のために奮闘した先人の軌跡が記されてきました。この「カニジル」も今の医療を映す一冊として後世に名が残ったりして…フフフ

### 表紙デザイン 三村 漢

いつもはあっという間の「もう12月かあ~」ですが、昨年は時間が揺らいでとても長く感じました。その中、編集チームは調和がとれだし、次の段階に進もうとしております。改めて、型は持ちつつその型にはまらない無二な一冊を目指したいです。

### ページデザイン 矢倉 麻祐子

6杯目の見どころは中村さんの「フォトルボ」(個人的に)。優しくて暖かい写真と言葉の素敵なページができました。カニジルではレアな文章量少なめ特集ですが、写真が多くを語っています。ぜひぜひ、じっくりご覧ください。

### 〈飛鳥の森とは〉

鳥取大学医学部キャンパス内にある、学生や患者さんが集う憩いの場。「飛鳥(ひちょう)」という言葉には、鳥取大学の一層の飛躍を願う気持ちが込められている。

る。生の声に飢えている人の味方。古いメディアが一周回って一番新しいのかも

カニジルラジオには、論平さんら大先輩のラジオ魂も流れる。もちろん、本誌・田崎健太編集長の熱い思い入れと意気込みが番組のエンジンであることは言うまでもない。

そうラジオの「語る力」を説く。

カニジルラジオには、論平さんら大先輩のラジオ魂も流れる。もちろん、本誌・田崎健太編集長の熱い思い入れと意気込みが番組のエンジンであることは言うまでもない。

外な経験や医療への思いを田崎さんの軽妙洒脱なインタビューが切っていく。分かりにくく、担当する木野村尚子アナウンサーは地元島根県出身。毎週土曜日の昼12時25分~55分放送。公式YouTubeとradikoでも配信。本誌『カニジル』とともに、田崎さんの豊富な引きだしと多彩なゲスト、医療の話を是非ラジオでも聞いていただきたい。大切な「言葉の力」とともに。



〒683-8504 鳥取県米子市西町36番地一  
鳥取大学医学部附属病院 広報・企画戦略センター内「カニジル」編集部  
TEL 0859-38-7039 / FAX 0859-38-6992  
MAIL byouin-kouhou@med.tottori-u.ac.jp



フォトグラファー 中村 治が切り取る  
とりだい病院の日常



中村 治

1971年広島生まれ。成蹊大学文学部を卒業後、中国・北京に2年間留学。ロイター通信社北京支局の現地通信員としてキャリアをスタート。ポートレート撮影の第一人者である坂田栄一郎氏に師事。2006年に独立、現在は雑誌広告等のポートレート撮影を中心に活動している。中国福建省の山間部に点在する客家土楼とそこに暮らす人々を撮影した写真集『HOME』(リトルマンブックス)が好評発売中。2020年「さがみはら写真新人奨励賞」受賞。



check!

とりだい情報  
日々発信中！

@ToriidaiHospital

www.facebook.com/ToriidaiHospital/